

# 総務大臣賞

ハイビジョン特集

『若き宗家と至高の三味線』 ～清元二派 88年ぶりの共演～



NHKエンタープライズ、クレイジーダイヤモンド/NHK (BSHi)  
 プロデューサー 山登 義明(NHKエンタープライズ)  
 演 出 藤田 純夫(クレイジーダイヤモンド)

## 芸の道は修羅の道

清元とは、江戸時代から続く三味線音楽のひとつで浄瑠璃の一種。粋で軽妙な音楽性は江戸の華としてひろく愛されてきた。ところが、88年前に、清元の内部で争いが起きて清元宗家の「高輪派」と清元流「梅派」の2派に分裂した。その後、同じ舞台に上がることはなかった。

2009年にニュースが飛び込んできた。分裂していた清元の2つの流派が2010年夏に合同で演奏会を行うというのだ。邦楽界では大きな話題となっていると聞いて心が躍った。実は、2年前に私とディレクターの藤田純夫は文楽の三味線と太夫の熱い闘いのドキュメンタリーを作ったことがある(「闘う三味線」)。芸をめぐる闘いというものそのとき見た。まるで格闘技だった。火花を散らし徹底的に渡り合う。意地の張り合いはすさまじいものがあり、戦う両者は一歩も譲らない。優雅な外観とは真逆の激しい芸の応酬が幾度もあった。花田清輝が喝破した「もう一つの修羅」である。以来、芸をめぐる真剣勝負にはとてつもないエネルギーが放散される、思いも寄らない「ドラマ」が出現するという話を、私も藤田ディレクターも体験的に覚悟していた。

そこへ、清元の88年ぶりの合同演奏が行われるという話が飛び込んできたのだ。分裂していた2つの派が88年ぶりに合同で演奏すると言うのは並大抵のことではない。芸の闘いが起きるかもしれない。飛びついたのは言うまでもない。

清元の宗家を代々束ねるのは清元延寿太夫。現在は7世が務める。51歳。勢いがある。だが、わずか10年の修業で宗家を襲名した身の上。経験が浅い。といっても、大名跡延寿太夫は流派のトップ、絶対的存在。

一方、もう一つの清元流、家元は四世・清元梅吉、77歳。梅吉は若い頃から逸材の誉れ高く、至高の三味線と知られている。二人は父と子ほど年齢が離れていた。対照

的な二人は主人公のキャラクターとしては申し分ない。激しい闘いが予想された。

ところが、二人の稽古が始まるや闘いという荒々しいものはまったくなかった。延寿太夫は礼を尽くして梅吉に教を乞い、学ぶ姿勢をとった。それに応えて私利私欲を捨て指導する梅吉。二人の間には芸の継承を通して親子のような感情が流れていった。当初の仮説は消えたかと思われた。

しかし、芸の世界は深かった。両派の側近たちの思いは二人の家元とは微妙に異なっていたのだ。二人だけの稽古が終わり、人間国宝ら側近が稽古に加わった時、両派の芸風の違いが露わになってくる。ここから物語の第2章が始まっていく。88年ぶりの大舞台。芸の違いを乗り越え、はたして演奏会は成功できるか――。

200日を超える長期取材。まったく予断を許さない状況が続いた。取材を終えて帰ってきた藤田ディレクターと構成を検討するとき、毎回変化することに二人して驚き呆れた。後に、放送を見た人から、まるでドラマを見るようだという声を聞いた。

エグゼクティブ・プロデューサー 山登 義明  
 (NHKエンタープライズ)



第28回

# ATP賞 2011

## テレビグランプリ

社団法人 全日本テレビ番組製作社連盟

発行/社ATP 〒107-0052 東京都港区赤坂7-10-6 赤坂今野ビル4F TEL.03(3582)8520 FAX.03(3582)8063

2011年10月20日、作り手が選ぶ作り手のための賞「ATP賞テレビグランプリ2011」が六本木のハリウッドホールで行われました。28回目を迎えたATP賞。神田愛花(NHK)、上宮菜々子(テレビ朝日)両アナウンサーが司会・進行役を務め、式典を華やかに彩りました。松崎公昭総務副大臣、小野直路NHK副会長、広瀬道貞民放連会長、迫本淳一コ・フェスタ実行副委員長のご挨拶後、中尾幸男ATP理事長による開会宣言とともに開幕。応募作品130本から、共同テレビ制作のドラマ「フリーター、家を買う。」が見事グランプリに輝きました。今年には稀に見る接戦となり、会場は目の前で繰り広げられる白熱したグランプリ争いには大いに盛り上がりました。



上宮菜々子(テレビ朝日)アナウンサー 神田愛花(NHK)アナウンサー

## グランプリ 「フリーター、家を買う。」

原 作 有川 浩  
 「フリーター、家を買う。」  
 (幻冬舎刊)  
 脚 本 橋部 敦子  
 編 成 企画 瀧山 麻土香 水野 綾子  
 プロデューサー 橋本 美美  
 演 出 河野 圭太 城宝 秀則  
 音 楽 高見 優  
 主 題 歌 嵐「果てない空」  
 (ジェイ・ストーム)  
 挿 入 歌 西野カナ「君って」  
 (SMEレコーズ)

●キャスト  
 二宮 和也 香里奈 井川 遥  
 丸山 隆平(関ジャニ∞) 井上 正大  
 岡本 玲 大友 康平 鷲尾 真知子  
 眞島 秀和 児嶋 一哉(アンジャッシュ)  
 山本 龍二 嶋 大輔 坂口 良子  
 竹中 直人 浅野 温子

●スタッフ  
 スケジュール: 桐ヶ谷嘉久  
 演出補: 八十島美也子 下向英輝  
 石井梨枝 中村亮太 制作担当: 持田一政  
 制作主任: 豊島さおり 鈴木哲  
 制作進行: 皆川なごさ 佐々木豪 記録: 津嶋由起江 田中小鈴 プロデューサー補: 廣岡美代 上久保友貴 技術プロデューサー: 長谷川美和  
 TD: 山岸桂一 撮影: 伊藤清一 撮影助手: 牧野辰吾 スタジオカメラ: 磯貝喜作 平田修久 後藤継一郎 金田智幸 映像: 吉川博文 録画: 岡本卓  
 照明: 阿部慶治 照明助手: 成田卓嗣 大須田純子 荒井徹夫 浅田和男 三宅洋 音声: 竹中泰 音声助手: 日下部徹 菅野佑介  
 音楽プロデューサー: 志田博英 音響効果: 本郷俊介 選曲助手: 松井謙典 編集: 新井孝夫 編集助手: 安田多希 ライン編集: 伊藤裕之  
 ライン編集助手: 鈴木のぞみ MA: 市村聡雄 技術デスク: 石久保香織 美術プロデューサー: 杉川廣明 デザイン: 柳川和央 美術進行: 竹田政弘  
 大道具製作: 内海靖之 大道具操作: 谷古宇稔 装飾: 駒津誠二 堀口浩明 石原多美子 持道具: 片山彩 衣裳: 伊藤栄子 衣裳助手: 南啓太  
 スタイル: 野村昌司 原田幸枝 ヘアメイク: 西村真理子 小出みさ 鈴木麻水美 久野友子 ヘアメイク助手: 澤入礼江  
 アクリル装飾: 中村哲治 洲美香 建具: 三田村賢 電飾: 中園誠四郎 植木: 後藤健 フードコーディネーター: 住川啓子  
 医療監修: 西脇俊二(日本精神神経学会専門医・指導医) 土木監修・指導: 平岡成明(株式会社建設施工学アカデミー)  
 看護監修: 石崎理恵 渡邊絵美 リサーチ: 喜多あおい 広報: 島谷真理 広告宣伝: 平井隆 ホームページ: 須之内達也 スチール: 川澄雅一  
 CG: 鈴木鉄平 三塚篤 車輛: ファン コマツサポートサービス 撮影協力: NEXCO中日本 音楽協力: フジパシフィック音楽出版  
 協力: フジアル バスク 緑山スタジオシティ 恵積興業 制作: フジテレビ 制作著作: 共同テレビ



# グランプリ



「フリーター、家を買う。」

プロデューサー 橋本 芙美  
(共同テレビジョン)

連続ドラマ「フリーター、家を買う。」は、河野監督の指揮の下、本当にチームワークのいい現場で、最終話に近づくにつれ寂しさや終わってほしくない思いが募るような、そんな幸せな作品でした。

原作者の有川浩先生も、関西のお住まいから何度も東京の撮影現場に足を運んでくださったり、頻繁に差し入れを送ってくださったり…そのあたたかいお心遣いに現場一同感激しておりました。

「社会からのドロップアウト」、「ひきこもり」、「うつ病」、「ご近所いじめ」、「親子の確執」など、暗くなりがちな問題をいくつもはらんだ題材であったにもかかわらず、時にコミカルであたたかく最後には感動を呼ぶドラマとして多くの方々から反響をいただけたのは、まずは橋部さんの書かれた素晴らしい脚本の力によるところが大きかったと思います。

そして、実力と個性が光るキャスト陣。橋部さんの脚本から生まれた登場人物を、二宮和也さんをはじめとするキャストのみなさんが、より深く人間味溢れるキャラクターにしてくださいました。

どのシーンも思い入れが深いですが、特に印象深いのは、4話のクライマックスです。うつ病を発症した母・寿美子(浅野さん)の看病を父・誠一(竹中さん)に頼らず自分でやると決意した誠治(二宮さん)でしたが、就職活動とアルバイトと母の面倒で心身ともに疲弊し、ある日アルバイト先の仲間とカラオケに行った時のこと。誠治が珍しく演歌を熱唱し、自分の席に戻った直後、「おふくろの面倒みるの、もう無理ですわ…。もし、今おふくろがいなくなったら、俺はたぶん…ほっとすると思う…」と語り、みんなの前でポロポロと泣き出すシーンです。ずっと見守ってきてくれた母の病気を自分が何とかしたい思いと、でも目の前の物理的な大変さに振り回されて、自分の本音と向き合い思わず感情が溢れ出てしまう誠治。その晩誠治は帰宅後、それでもいつものように母の手をとってハンドクリームを塗ってあげるのでした。

この一連のシーンをはじめ原稿で拝読した時、胸の奥を掴まれたような感覚と同時に、涙が出てきました。橋部さんの生み出した心の芯を突くような名台詞、それを体現した二宮さんの名演技、このシーンに感動し涙した視聴者の方々も多いのではないかと思います。

特に大きな事件が起こるわけでもないドラマですが、こうした日常の感情の機微を捉えた脚本、演技、演出があったからこそ、多くの方々からの共感を得ることができたのだと思います。

準備期間中にスタッフが一番頭を悩ませたのは、工事現場のロケ場所でした。ゼロから工事現場を再現することは諸事情により物理的に困難で、工事中の現場をお借りするしか手がありませんでした。しかし、景観や撮影条件にあう場所が少なく、また安全面の問題からなかなか許可を得にくい状況が続き、時間だけが過ぎていきました。スタッフ総動員で情報収集をし、関東近郊さらには東海地方まで文字通り足で探し回りました。そんな中、ネクスコ中日本の方々が、建設中の新東名高速道路の工事現場を提供して下さることになり、こうして静岡県富士市で工事現場のロケを敢行できたのでした。多大なるご協力をいただいたネクスコ中日本の皆様、ならびに地元フィルムコミッションの皆様には深く感謝しております。

気を抜けば熱中症になりかねない夏の猛暑下での撮影、深夜までスタジオ収録だった日、重機を使った大規模なロケなど、大変なことはたくさんあったはずなのに、思い出せば現場にはいつもスタッフやキャストの笑い声が絶えなかった気がします。

ちょっとした物でも面白がってアイデアを膨らませてくれた美術チーム、腕の確かさだけでなく現場を盛り上げてくれた技術チーム、現場をうまくまとめてくれた演出部やAP部、いくつもの印象に残るいいロケ地をアレンジしてくれた制作部、撮影現場以外でもこの作品を愛し全力でひろめてくれた広報や広告宣伝の皆様、他にも本当にたくさんのスタッフのみなさんのおかげで、約半年間におよぶ制作期間を無事乗り越えることができました。

そして、演じることだけでなく番組宣伝なども数多くこなして下さった二宮さん、多忙の中でもいつも笑顔でいてくださり、その二宮さんの存在が、全てのスタッフ・キャストの元気につながっていたように思います。

全てのスタッフ・キャストのみなさんに感謝をすると共に、この喜びをみんなでわかち合いたいと思います。

このたびは、とても栄えある賞をいただき、本当にありがとうございました。



「フリーター、家を買う。」

ディレクター 河野 圭太  
(共同テレビジョン)

このたびは、グランプリという名誉ある賞をいただき、本当にありがとうございます。

この作品の演出の話が来たのは2010年の夏、僕が打ち合わせに参加したときには、すでに企画の内容は決まっていた。原作は「フリーター、家を買う。」、『家族の絆』や『人生の再スタート』をテーマに、家族が一緒に見られる、社会派のホームドラマをやりたいと言うことだった。

設定は、仕事に疑問を持ちドロップアウトしていく主人公、自分勝手に頑固な父親、うつ病を発症する母親、崩壊していく家庭。とにかく、暗く地味になりそうな条件がそろっていた。

家族で一緒に見るホームドラマは過去にたくさんのお手本になる秀作が有る。それはどれもベースは明るく温かい。それを目指すなら、この重いテーマにとらわれすぎないようにしなければならなかった。

しかし1話の初稿を読むと、主人公誠治のダメっぷりも面白く、ラストに向けての彼の苦悩も見事に描かれていて、家族同士が反目していても根底にはお互いを思う気持ちの流れが流れている。だから余計に苦しんでいる…。企画者達の想いが伝わってくる素晴らしい本だった。

脚本の橋部さんには本当に感謝している。素晴らしい本をいただいて、どう映像にするかが次の問題だった。

その答えは武家のセット収録の日に出た。言いたいことを言い合う姉弟(井川遙さんと二宮和也くん)の会話は軽妙でテンポ良く心地よい。それを笑顔で見守る母親(浅野温子さん)の暖かさ。そしてうつを発症したときの凄みはさすがである。さらに姉弟と、ことごとくぶ



つかる父親(竹中直人さん)はさすが名優。ずしりと重く、絶対的な父の威圧感。すごい。しかし家族で見る…にはちょっと重い。竹中さんに相談すると、「このオヤジ怒ってばかりだからナァ…」とかいいながら、がらりと変わった。姉弟ともびたりとかみ合う。このドラマのトーンが決まった瞬間のような気がした。

そして何より、主人公誠治(二宮くん)の演技に助けられた。

最初のダメっぷりは自然で、ちょっと腹が立つほど。母の発病からの苦悩は見事で、一番大切なシーンでの瞬発力はすごいものがあった。

一つだけ二宮くんのエピソードを上げておく。撮影が始まって2日目。1話のクライマックスの工事現場。自分のふがいなさやうちひしがれた誠治が雨に打たれて涙を流すシーン。テストを終えた二宮くんが僕にある提案をした。(具体的には伏せます)

ここから誠治は生まれ変わり、誠治の描き方が決まった。

この主役はこんな事まで考えているのかと思い、演出家としてちょっと恥ずかしく、でも、何だかすごく嬉しかった。彼に対する絶大な信頼が生まれた。

本当にこの俳優陣に支えられていたという気がする。そして楽しんで皆さんのアイデアを出し合ってくれたスタッフや、キャスト、協力してくれた多くの人たちに支えられていたのだと思い、心から感謝しています。

この人達みんなに与えられた賞だと思います。本当にありがとうございました。



# 最優秀賞

ドキュメンタリー部門

ハイビジョン特集『北海道 豆と開拓者たちの物語』



プロダクション・エイシア、NHKエデュケーショナル/NHK (BSHi)  
 プロデューサー 大兼久 由美(プロダクション・エイシア)  
 河邑 厚徳(NHKエデュケーショナル)  
 高瀬 雅之(NHK)  
 演 出 柴田 昌平(プロダクション・エイシア)

ディレクター 柴田 昌平(プロダクション・エイシア)

番組をご評価いただき本当にありがとうございます。この番組は、映像によって庶民の歴史と記憶を記録する、新しい方法論をめざしたものです。文字で記された「正史」には残されない庶民の歴史、特に、埋もれがちな女性たちの果たした役割を、在来種の「豆」に語る、という試みです。

この番組の取材のため、私たちは2組の農家を中心に年間記録することに決め、道内2ヶ所の家を借りました。農家の人たちと可能な限り時空を共有することで、少しでもその生活感覚に近づいたかったのです。合計200日のロケ——ADの堀部拓磨君が一人で残り小型カメラで撮影する日も多々ありました。

取材される側にとっては、私たちが受け入れることは本当に大変だったと思います。主人公のひとり、「最後の開拓民」と皆から尊敬される86歳の服部行夫さんに「もう来るな」と言われたことがあります。不器用な私は「豆づくりの記録ではないのです、生きる力を学びたいのです」とひたすら正面から食い下がりました。行き詰まったときに助け船を出してくれたのは、90歳のツルおばあちゃん。最初は撮影を嫌がっていたが、腹が決まってからは、すべてを受け入れてくれました。

取材に応じてくださった服部行夫さん、ツルさん、平沢優さん、そしてご協力くださった地元のたくさんの方々に、心より御礼申し上げます。

そのツルおばあちゃんが、今年8月、脳血栓で倒れてしまいました。病院で寝たまま、ほとんど反応がありません。折から、TPP是非の結論を急ぐという報道。無限の知恵をはらんだ地域社会が、都市の論理を優先するためにどれほど崩壊の危機に瀕しているかを、1年を通じた取材で身にしみた私は、この場をお借りして強く叫びたい——小さな農家や地域社会を失うことは、生きる可能性を失うことだ、と。



情報バラエティ部門

『世界で誰も見たことがない対決SHOW ほこ×たて』



厨子王、ザ・ワークス、ディ・コンプレックス/フジテレビ

プロデューサー 石川 綾一(フジテレビ)  
 林 はる佳(厨子王)  
 西原 信行(ザ・ワークス)

演 出 石田 昌浩(厨子王) 森田 俊介(厨子王)

総合演出 石田 昌浩(厨子王)

「ほこ×たて」をATP賞情報バラエティ部門の最優秀賞に選んでいただき、心より感謝致します。番組のコンセプトは「矛盾」です。言うまでもなく中国の有名な故事成語ですが、勉強嫌だった私に当時の先生が(かなり昔の話ですが…)この「矛盾」と「蛇足」の話に興味深くしてくれた事を40年近くたった今でも鮮烈に覚えていて、それがヒントになりました。そもそも「史上最強対決」という、シンプルなテーマが私が最初に考えた企画でした。それをフジテレビ石川プロデューサーにぶつけたところ、「何か新しい切り口を…」と提案され、その時思いついたのが「矛盾」をベースにした最強対決だったのです。考えてみれば入口を変えるだけで随分、番組のイメージも変わるものだと改めて感じます。こうして現代版、矛と盾とも言える「絶対に穴を開けられるドリルVS絶対に穴が開かない金属」という対決が生まれました。今や「ほこ×たて」を象徴するような企画ですが、我々スタッフも毎回、「本日にどっちが勝んだ!?!」とハラハラドキドキしています。そんな制作サイドの空気が、しっかりテレビを通じてお茶の間に届いている事を信じて作っていますがいかがでしょうか?そして、我々が感謝しているのが「ほこ×たて」のスタジオの空気です。予測不能な対決、興味ある対決…、といっても「一般の方向士の対決」であり、しかも、金属業界とか、職人の世界とか…かなり地味な対決になってしまいそうなこの番組…それを少年みたいにあくどく応援してくれているMCのタカアンドトシのお二人や、その他演者の皆様です。この空気に救われています。また放送後、多くの対決者の方が「出演して良かった」と言ってお下さっていることも、励みの1つになっています。

今後も多くの皆さんに興味を持っていただけるような「ほこ×たて」を提案し、日本の技術力、職人の熱さ、お父さんは凄いだぞ!!をお届けできればと思っています。

これからも熱い応援をお願いします。ありがとうございました。



## 審査講評



ATP賞テレビグランプリ2011 審査委員長 金澤 宏次

(ユニオン映画)

### 《審査体制について》

昨年度より引き続き、審査委員は9名体制。各部門3名で、専門性による審査を重視し、“より複眼”で審査に臨んだ。“より複眼”での視点を持ち、テーマ性の高い硬派の作品から、多くの視聴者を魅了する大衆性、娯楽性の色濃い作品まで、テレビ番組を評価しうる様々な価値観をもって審査することを旨とした。

### 《審査方法について》

各部門、3名の審査委員が各分科会において、創り手の立場から、専門性の観点により審査。(審査委員長は、各分科会における審査に全て参加)

専門性の観点とは、企画・発想の創意工夫、取材・構成力、演出力、完成度の高さ、トライアルな姿勢、視聴者をどれだけ魅了したか等々。各分科会において、その専門性から最優秀賞候補作を各1作品、また優秀賞候補作を各3作品、それぞれ選出。3部門において、計3作品の最優秀賞候補作、また計9作品の優秀賞候補作が残された。引き続き、9名の審査委員による全体審査会において、これらの候補作品が受賞作品として相応しいかどうか様々な観点から議論され、全候補作品の受賞が承認され、選出された。

結果、完成度やテーマ性の高さのみにとらわれることなく、幅広い価値観から、テレビ番組としての豊かな魅力の評価された作品が最終的に選出された。

### 《審査総評》

#### 【ドラマ部門】

応募総数、27作品。秀作、力作が目白押しで、他ジャンルの審査委員からも総じて大変高い評価を得た。受賞作以外にも、多くの優れた作品が並び、審査委員としては嬉しい悲鳴をあげた。

#### 【ドキュメンタリー部門】

応募総数、59作品で最激戦区。多くの優れた作品が寄せられたが、見る者を圧倒的な感銘で包み込む、衝撃的な作品には出会えなかった。

#### 【情報・バラエティ部門】

応募総数、44作品。今回、いわば“コロンブスの卵の発見”とも言える、企画・発想の創意工夫、並びにエンターテインメント性の高い演出、この二点の魅力において突出した作品が高い評価を勝ち取った。

### 《審査講評》

\*優秀賞の講評はエントリー番号順

#### 【ドラマ部門】

最優秀賞「フリーター、家を買う。」

何をしても長続きしない25歳の息子が、母の鬱病をきっかけに、目標に向かって再スタートを切るストーリー。母のために家を買うという壮大な目標を掲げた主人公が、困難にくじけながらも、続けることの大切さを知り、自分と向き合い、仲間を得て成長していく。「いつからでも再スタート出来るわ」の母の台詞は、視聴者みんなに対する、応援の力強いメッセージであり、この作品こそ、今作るべき作品、そして視聴者に届けるべき作品だ。時代のニーズを的確に捉えたスタッフのセンスと表現力は称賛に値する。そして新境地を拓いた主演・二宮和也の演技も光る。見守ってくれる人がいることが、どんなに嬉しく有難いことか、このドラマが気付かせてくれた。すべての迷える若者に見せたいドラマである。

### 優秀賞「再生巨流」

流通業界に生きる男たちの挫折と再生を描いた社会派ヒューマンドラマ。登場人物たちが仕事を通じて人間として成長していくプロセスを、現代の組織社会の暗部も含めて極めてリアルに描きながら、最終的には感動を呼ぶエンターテインメント作品に仕上げた脚本・演出の技量が見事であった。

### 優秀賞「妻を看取る日」

がん治療の最前線に立つ名医が、肺がんの妻を看取ることに。原作は国立がんセンター名誉総長、垣添忠生氏の著作で、主人公の語り口と、ナレーションで展開するドキュメンタリー・ドラマ。脚本もよく整理されていて、抑制のきいた演出はテーマに相応しい作風に仕上がっている。國村隼と市毛良枝の好演により、底知れぬ哀しみに包まれながらも、冷静な内面の記録として、夫婦愛が見事に描かれている。若手制作者たちへのお手本でもあり、低予算で制作されるドラマのひとつの鑑でもある。

### 優秀賞「なぜ君は絶望と闘えたのか」

光市母子殺害事件を追った記者の手記を元に、被害者遺族の理不尽な悲しみ、司法制度の矛盾など多様なテーマを追求した社会派ドラマ。抑制されたトーンの石橋冠の演出に、実力派の役者たちの演技が噛み合い、客観性を保ちつつ静かな感動が広がるヒューマンな作品に結実した。何より、未だ係争中の題材を製作・放送しようとする関係者の強い意志に敬意を表したい。

#### 【ドキュメンタリー部門】

最優秀賞「北海道 豆と開拓者たちの物語」

小さな豆から広がる豊かで心温まる物語。それを、一年を通して記録された雄大な北海道の風景が支える。雪景色から新緑への同ボジ撮影、ハイスピードの豆の花の開花、開拓民の暮らしや豆を作る営みが丁寧に描かれ、飽きさせない様々な工夫があった。多くの災いに直面した今年、人が働いて食べて生きていこうとする姿に深い感銘を受けた。無名の人々の慈しみが、歴史を紡ぐのだと確信した。

優秀賞「戦場の花 東京ローズ」

作家ドウス昌代 of 労作で「東京ローズ」のことは大方わかっていたが、取材チームは更に深くその謎に迫ろうとする。当時の女性アナウンサーの消息を追うことで6人のローズを突き止め、500ページものFBIの極秘ファイル入手、様々な秘話を解きほぐしながら、新たな東京ローズの真実を炙り出す。その執拗な取材の集約力には脱帽した。

優秀賞「若き宗家と至高の三味線」

袂を分かった浄瑠璃「清元」の二派が八八年ぶりに同じ舞台上に上がる過程を克明に追う。若き宗家、延寿太夫と三味線の天才梅吉の緊張あふれる稽古には、やがて、親子のような情愛が芽生えていた。芸にかける二人の家元の魂と意地の激突をカメラは脇目もふらず捉え、伝統芸能の厳しさと奥深さが浮き彫りにされている。同じスタッフで制作した「闘う三味線 人間国宝に挑む」も2007年のATP賞を受賞している。

優勝賞「チェルノブイリ25年目の真実」

東日本大震災の時、偶然にもチェルノブイリに向かっていた取材班は、当初やることになっていた番組の意味を問い直す中で、石棺の内部映像を撮りながら、関係者の話は福島へのメッセージと受け取る。これが、今を生きる人々に伝えるドキュメンタリーである。また、様々な情報が飛び交う中で、放送を出していった覚悟と力量を高く評価したい。

## 審査講評

### 【情報バラエティ部門】

最優秀賞「世界で誰も見たことがない対決SHOW ほこ×たて」  
矛盾という言葉を超絶にコンセプト化した新ジャンル開拓の番組である。技術者のプライドと会社の誇りをかけた戦いは手に汗握る真の人間ドラマ。思わずテレビの前に釘付けになる視聴者も多い技術者を格闘技というツールを用いてバラエティ番組に昇華させた傑作です。

### 優秀賞「世界一受けたい授業」

今や「日本一良質なバラエティ番組」と言っても過言ではないだろう。また、普段私たちが会う事の出来ない様々な分野の専門家を、世に知らしめた功績も大きい。ある出演者の話だが、実験や場面転換のある番組収録はなかなか時間通りに進まないが、この番組はとてもスムーズに進行する。スタッフが専門家の話をしっかりと理解し、事前に緻密な構成とシミュレーションをしているからこそ出来る事だと思う。画面からは伺えないプロの仕事である。

### 優秀賞「スイエンサー」

日常の小さな疑問(いわゆるあるあるネタ)で視聴者の興味を引き、その疑問を知らず知らずのうちに科学の世界で解決する番組である。番組を見終えた後の爽快感は、「出来なかった事が出来るようになった」という魔法のような世界観に浸れるからであろう。「世の中には不思議な事など何もないのだ」という或る小説の言葉が心に浮かぶ番組です。

### 優秀賞「のどまんTHE!ワールド」

この作品はサタデーバリューフィーバー枠での放送となりました。外国人が真剣に日本の歌を歌う姿、日本語を学ぶ姿勢から日本の名曲、日本の素晴らしさを再発見できます。「のど自慢」という普遍的なテーマに「歌唱力がある外国人」を組み合わせ海外に愛される・誇れる日本文化の新たな一面を見出しました。

### 「ATP賞テレビグランプリ2011」審査委員

- ◆審査委員長 金澤 宏次 (ユニオン映画) ※ドラマ部門兼務
- ◇ドラマ部門 佐野 奈緒子 (大映テレビ) 橋本 孝 (ドリマックス・テレビジョン)
- ◇ドキュメンタリー部門 牧 哲雄 (ドキュメンタリージャパン) 川良 浩和 (NHKエンタープライズ)
- 須田 裕子 (アミューズ)
- ◇情報バラエティ部門 荻原 伸之 (ジッピー・プロダクション) 國弘 明子 (安寿)
- 長濱 薫 (日テレアックスオン) (敬称略)

## 新人賞審査講評

### 仲宗根 千尋 ディレクター/㈱グループ現代

NNNDキュメント10「いじていめんそーれ ～故郷へ進軍した日系米兵～」

沖縄で生まれ育ったディレクターが、素直に伝えたいことを番組という形で表現しているのを強く感じた。決して内地の人間では不可能な、沖縄の人たちの辛い記憶へのアプローチ、そして本音。うまく引き出すことができています。更なる構成員、展開力の構築、そして沖縄以外のことをテーマとした作品でどのようなモノを作れるか、今後の期待も含めて、新人賞に値する作品だと思ふ。

沖縄の戦争を沖縄の若者が描き出す作りは、正直本土に生まれ育った者には難しい。沖縄戦(戦後)の理不尽さに対する感情、疑問をストレートに伝えることができていたと思いました。と同時に、「同郷」というだけでは引き出せない人々の思いを粘って聞き出したのではないかと気が引けました。沖縄以外の人々の思いもたくさん描いてほしいと思います。

### 菅井 祐介 ディレクター/テレコムスタッフ(株)

「アトラシキズナ オヤジたちの運命の殴り愛」

決して壮大な世界ではないが、本気で殴りあいにも挑むオヤジたちの姿をリアルに描いている。相手がアマチュアならでは、密着ぶりもお見事。ナレーターに中村有志氏を起用するなど、若いディレクターならではの冒険的な演出も評価できる。なかなか情報がつかみにくいアマチュアスポーツの世界を題材にするリサーチ力なども含め、時間と労力をかけているのが分かる。本人の才能と努力が結実した今作品は、新人賞受賞に十分値するものだと思う。

素直に面白いと思えました。奇抜な演出もなく、どんでん返しがある

わけでもなく、想像の範囲を超えることもありませんでした。ストレートに人の温かさや強さが心に残りました。ディレクターが出ばらずに「人の話を聞く」ということに徹しているからでしょうか。取材者との距離の取り方は素晴らしいと感じました。

(おそらく、CSのドキュメンタリー枠で予算も非常に限られているなか、自由のきかないこともあったと思いますが、この番組制作にあまり明るい未来がないなか、予算が少なくてもいい番組は作れるという若手制作者全員の励みになると思います。)

### 廣岡 知人 ディレクター/㈱テレビマンユニオン

ドキュメンタリーWAVE「小さな町の国際紛争 ～太地町とブルーム市の苦悩～」

ニュースなどで報道されつくした感のある「太地町の捕鯨問題」ではあるが、新たに「姉妹都市」という観点から「国際紛争」に繋がったところは、新人とは思えない可能性を感じる。町の一町民レベルの人たちまでインタビューをしていることで、非常に説得力があり、リアリティがある。決して飽きさせず、視聴者を番組の世界に集中させる構成員、展開力は秀逸。諸先輩のアドバイスもあったとは思いますが、一作目でこのようなクオリティーの高い作品を作れる実力は、今後も注目したい。

とてもとても分かりやすくまとめたクオリティーの高い番組だと思いました。解決という言葉では終われない「価値観の違い」というテーマをどう終わらせるのか、思わず見入ってしまいました。多方面からのひとつひとつの丁寧な取材の積み重ねが、見る人に安易に「分かった」と思わせず、見た後に「考える」という方向に向かわせているようで、こんな作り方ができたらうらやましいと正直思っていました。

### 「ATP賞テレビグランプリ2011」新人賞 審査委員

- ◇審査委員 浦 弘二 (東京ビデオセンター) 佐藤 直子 (かわうそ商会)
- (敬称略)

## 優秀賞

### ドラマ部門

#### WOWOWドラマW『再生巨流』

### 国際放映/WOWOW

プロデューサー  
河角 直樹 (国際放映)  
青木 泰憲 (WOWOW)

監督  
鈴木 浩介 (ハニーバニー)



### ドラマ部門

#### ハイビジョン特集『妻を看取る日』

～国立がんセンター名誉総長 喪失と再生の日々～

### テレビマンユニオン/NHK (BSHi)

プロデューサー  
加藤 義人 (テレビマンユニオン)  
鳥本 秀昭 (NHK)

演出  
加藤 義人 (テレビマンユニオン)



### ドラマ部門

#### ドラマWスペシャル『なぜ君は絶望と闘えたのか』

### テレパック/WOWOW

プロデューサー  
菱田 光彦 (テレパック)  
黒沢 淳 (テレパック)  
岡野 真紀子 (WOWOW)

演出  
石橋 冠 (フリー)



### ドキュメンタリー部門

#### BS朝日開局10周年記念週 特別プログラム『戦場の花 東京ローズ』

～謎の謀略放送 女性アナウンサーの正体～

### テレビ朝日映像/BS朝日

プロデューサー  
加納 満 (テレビ朝日映像)  
岡本 基晃 (BS朝日)

演出  
高橋 司 (テレビ朝日映像)  
渡部 露子 (テレビ朝日映像)  
会田 昌弘 (テレビ朝日映像)  
北村 亜子 (テレビ朝日映像)



# 優秀賞

ドキュメンタリー部門  
ハイビジョン特集『若き宗家と至高の三味線』  
～清元二派 88年ぶりの共演～

NHKエンタープライズ、  
クレイジーダイヤモンド/  
NHK (BSHi)  
プロデューサー  
山登 義明(NHKエンタープライズ)  
演出  
藤田 純夫(クレイジーダイヤモンド)



ドキュメンタリー部門  
報道発ドキュメンタリー宣言『チェルノブイリ25年目の真実』  
～前編 世界初公開・炉心溶融の真実、後編 福島そして日本へのメッセージ～

テレビ朝日映像 / テレビ朝日  
プロデューサー  
加納 満(テレビ朝日映像)  
紫藤 泰之(テレビ朝日)  
演出  
高橋 司(テレビ朝日映像)



情報バラエティ部門  
『世界一受けたい授業』

創輝、エスト、日企、  
日テレアックスオン / 日本テレビ  
プロデューサー  
小川 潔(創輝)  
阿河 朋子(エスト)  
宇佐見 友教(日企)  
大澤 裕二(日テレアックスオン)  
演出  
滝田 朋之(創輝)  
奥村 竜(エスト)  
加藤 宏実(日企)  
笠間 崇(日テレアックスオン)  
ディレクター  
佐谷 直子(創輝)



情報バラエティ部門  
『スイエンサー』  
～定規も～んにも使わずに、手紙を超ビタリ3等分にしたい!!～

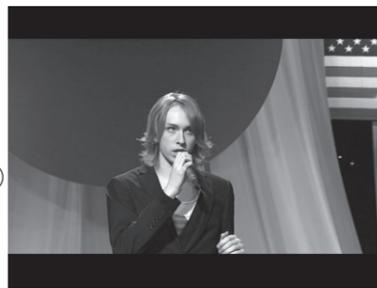
千代田ラフト、  
NHKエデュケーショナル /  
NHK (教育)  
プロデューサー  
遠藤 幸夫(千代田ラフト)  
村松 秀(NHKエデュケーショナル)  
土屋 敏之(NHK)  
演出  
小室 崇(千代田ラフト)



# 優秀賞

情報バラエティ部門  
サタデーバリューフィーバー『のどじまんTHE!ワールド』  
～外国人が熱唱♪ニッポンの名曲～

日テレアックスオン / 日本テレビ  
プロデューサー  
大澤 裕二(日テレアックスオン)  
東井 文太(日本テレビ)  
演出  
五歩一 勇治(日テレアックスオン)



# 新人賞



仲宗根 千尋  
(グループ現代)  
ディレクター

◎NNNDドキュメント'10  
「いじていめんそーれ ～故郷へ進軍した日系米兵～」

2005年グループ現代入社。  
AD時代から「沖縄人が受け継ぐ戦争体験、戦後体験にこだわりたい」と様々な沖縄企画を提案し、ディレクターデビュー作「いじていめんそーれ」で受賞となる。  
信念に基づいた粘り強いインタビューが高く評価された。

比嘉武二郎さんという存在を高校1年生の時に見た漫画で知りました。その話には私に強い印象を残し、デビュー作でご本人に会うことができ幸せだと思いました。実際にお会いした武二郎さんはウィットに富んだとても魅力的な人で、向い合っというよりも、隣に座ってインタビューしたいと思わせました。しかし、武二郎さんが「沖縄の人達に謝りたい。ごめんなさい」と言った時、私は急にこの仕事が怖くなりました。私に何の権利があって、こんなに静かに生きている人に「ごめんなさい」と言わせてしまったのだろうか、と。1年経って番組を見返してみると、その不安から武二郎さんを守り過ぎて、逆に伝わっていない部分もあるのではないかと感じます。アメリカと日本の中で複雑な立場にあった武二郎さんを描くのはとても難しかったです。



ある写真家が「人の痛みを利用していないか確認する」と言っていました。私もその言葉と向き合うことを忘れてはいたいです。



菅井 祐介  
(テレコムスタッフ)  
ディレクター

◎「アタラシキズナ オヤジたちの運命の殴り愛」

2007年テレコムスタッフ入社。  
番組の既存コンセプトに対し新たな提案をしてきた。50代で新たなチャレンジを自分に突きつける中年オヤジたちのキックボクシング。今後、番組づくりの焦点の当て方と取材力の成長に期待できている。

つくづく自分は運のいい人間だと思います。実家はお金ないのに、私立の高校へ行かせてもらい、しまいはに大学に行き、今は好きな仕事をしている。何も頑張っちゃいない。ただ運がよかっただけ。休みの日はテレビばかり見ている親を自分の作ったもので喜ばせたい、そう思っはじめたのがこの仕事でした。今回の番組はそんな親へ向けたものでした。決して楽な人生じゃない、不器用だけれど、それでも殴りあうことで生きていることを示そうとする二人のオヤジを見ているうちに、自分はみずからの親の姿を見ていたのだと思います。恥ずかしいので親がこの文章を読まないことを願います。



最後になってしまいましたが、「ダメAD」の自分を性懲りもなく使ってくれた会社の方々、スタッフの皆さん、取材に協力していただいた皆さん、本当に有難うございます。まだまだテレビは面白いんだってことを世間に知らしめるのが新たな野望です。

自分は本当に運がいいなあ。

# 新人賞



廣岡 知人  
(テレビマンユニオン)  
ディレクター

◎ドキュメンタリー-WAVE

「小さな町の国際紛争  
～太地町とブルーム市の苦悩～」

2008年テレビマンユニオン入社。  
受賞作の「小さな町の国際紛争」はディレクターデビューだが、企画の切り口、丁寧な取材、視聴者を惹きつける構成などで高い評価を受けた。  
作品そのもののクオリティも非常に高く、今後の活躍に期待したい。

異なる主張を持つ二つの国、町、人が、一方を排除すれば良いという考えではなく、どう共に生きていくかを模索している姿に感銘して取材を始めました。捕鯨問題中心地、太地町では、多くの物事が同時に進んでいくため、ただひたすら目の前で展開される出来事に喰らいついていくのに必死でした。結果、記録した映像は100時間近くになり、僕の頭の中はあたかも捕鯨問題に揺れる太地とブルームのように混乱していました。どうにか番組を完成できたのは、偏に支えてくれたスタッフのおかげです。正直、この番組でのディレクターとしての自己採点は50点以下です。ただ、そんな中、ある方から嬉しい言葉を頂きました。「取材対象者が皆「廣岡が可愛くて仕様がなない」といった表情で取材を受けている。それは誰にでも出来る事ではない。その事には自信を持って」。その言葉は、自分の演出にとって何が根幹になっているのか、示してくれた気がします。次こそは、自分自身に合格点をつけられるようなディレクションをしたい。それが、この番組に関わった人々への恩返しになると考え、これから頑張っていきたいと思えます。



# 特別賞

りんごラジオ・キャスター 高橋 厚氏



～震災情報を流すため、10日間で臨時FM局を立ち上げた放送人・高橋厚さんの「気骨」と「行動力」に対して～

栄えあるATP賞特別賞をいただきありがとうございました。  
この度の特別賞は、東日本大震災による全ての惨禍に対し、関係者の皆様の温かい励ましと受け止めております。有難ういただき、今後への力とさせていただきます。被災地・被災者は、月日の経過とともに元気を取り戻しつつあります。それは、私どものりんごラジオの日々のインタビューなどでも実感しています。例えば、3月11日(金)の大震災から10日後の3月21日(月)春分の日午前11時00分、私は、次のようなアナウンスで放送を始めました。「山元町の皆様、こんにちは。こちらはりんごラジオです。山元町の皆様のためのラジオとして、只今、放送を開始しました。これから様々な災害情報をお伝えしていきます。周波数は…」以後、町役場のロビーの片隅で、毎日午前7時から午後7時まで、災害情報や町民への被災インタビュー、全国からのボランティアさんや各界の著名ゲストの皆さんの激励の声などを放送ボランティアの仲間たちと共に放送してきました。中でも忘れられない場面は、自宅も学校も津波被害にあった小学生たち4人が、生放送のインタビューのあと、明るく元気に歌ってくれた校歌です。歌い終わって、周囲の町民の涙と大きな拍手が交錯しました。こうした子供たちの声や笑顔が、町の復旧に向けて大きな力になりました。あれから今、冬を前に災害臨時エフエムラジオ局は、どこも正念場を迎えていると言えます。放送の量と質。運営資金の確保。放送体制の維持。今後の存続の成否などが、それです。りんごラジオにとって、それらの壁を乗り越えるカギは、文字通り災害臨時エフエムラジオ局・りんごラジオという言葉の中に隠れていると思っています。

今後は、まだ青いりんごラジオが、赤く大きなりんごラジオに成長出来るように、人口1万5000人の小さな町ながらも、町のジャーナリズム精神や、災害・復興情報の開拓・発掘と、人と人との心の交流を大事にしながら山元町の皆さんの為のラジオとして放送していきたいと思っています。そして、この度のATP特別賞受賞の意味を見失わないようにしながら…。

「水戸黄門」制作チーム

## 水戸黄門



～42年続く国民的長寿番組、偉大な時代劇「水戸黄門」の制作チームに対して～

C.A.Lが制作させていただいております「水戸黄門」が、このたび「ATPテレビグランプリ2011特別賞」を頂戴しました。本当に有難うございます。  
遡ること42年、昭和44年8月4日の第1回の放送以来、視聴者の皆様の高いご支持を頂き続けて参りました「水戸黄門」の長い長い旅も、この12月19日の12月27日回で一息つくことになりました。ですから今度の受賞という御褒美も、私たち制作者にとりよりは、長旅をされてきた黄門様の御一行にちょっと骨休めをして英気を養ってみたいだろうと、下さったのだと思っております。  
黄門様御一行にはいろいろ御無理をお願いし続けて来た訳ですが、お陰様で御一行の活躍がテレビを見ていただいている皆さまに「笑い」を「涙」を「元気」をお届け出来たと自負しています。生意気なようですが、「水戸黄門」はこの40有余年日本人の生き方の原像、世の中の有り方、一つのスタンダードを映像を通じて訴え続けてきたのだと信じています。アポロ11号が月面に降りた昭和44年から戦後最大の惨禍を蒙ることになって仕舞った今年平成23年まで、世の中、世界が進歩したのかどうか。でも「水戸黄門」は世間の人情を味方にずーと頑張ってきました。これからも黄門様御一行は私たちの心の中で生き続けますし、もしかしてノンビリ骨休めなど出来ずぐずぐずされるお方ですからアツと言う間に皆さんの前に再登場されるかもしれません。「地上波での時代劇ドラマの復興を願い」と、頂いた賞状にもそう有ります。頑張りたいと思えます。

最後に、42年間お世話になりっぱなしの放送局様、お得意様、代理店様、三人四脚で一緒に制作に携わって下さった東映太秦映像様、オフィス・ヘンミ様、皆様有っての今回の受賞です。改めて、本当に本当に有難う御座いました。

代表取締役社長 山崎 純  
(C.A.L)

# 総務大臣賞審査講評



ATP賞テレビグランプリ2011

総務大臣賞 審査委員長 音 好宏  
(上智大学新聞学科 教授)

ATP賞総務大臣賞は、海外での評価に十分に耐え得る個性的な作品を顕彰するものである。今年のATP賞総務大臣賞の審査では、8作品が最終選考に残った。まず、この8作品について、その内容と審査会での委員による発言の一部を紹介しておく。

### 『若き宗家と至高の三味線』

戦前に分裂した浄瑠璃「清元」の高輪派と梅派が、その芸風の違いを乗り越え、二人の家元が88年ぶりに共演するまでを追いかける。浄瑠璃「清元」という日本の伝統芸能のみならず、日本社会の特質とも言うべき家元制度を象徴的に描ききっており、国際的に関心を持たれる素材、テーマである。この制作チームは、日本の伝統芸能の取材には定評があり、2007年度総務大臣賞も受賞している。本作品は、前作の取材・制作手法を踏襲したもののだが、それを踏まえてもなお、本作品は高く評価できる。

### 『パリの中国人』

1989年の天安門事件をきっかけに、パリで亡命生活を送る二人の中国人に焦点をあて、その暮らしを丁寧を追うことで、天安門事件が彼らに何をもたらしたのか、祖国とは何かを問う。亡命中国人たちの葛藤を通じて、いま、最も世界が関心を持つ中国のありのままが見える作品として評価が高かった。

### 『CO 移植コーディネーター』

臓器提供者(ドナー)と臓器移植者(レシピエント)の間を取り持つ移植コーディネーターという職業を主人公に、脳死、臓器移植という難しい問題をドラマ化。有料チャンネルという特性を活かし、社会的にも論議を呼んだ問題に、真正面から取り組む社会派ドラマとして評価も高かった。

### 『なぜ君は絶望と闘えたのか』

社会的にも注目を集めた山口県光市で起こった母子殺害事件をドラマ化。加害者の少年に極刑を求めた遺族の心情を、主人公

の週刊誌記者が「語り部」となって描いていく。地上波なら躊躇するテーマを題材にした挑戦的なドラマ作りに評価の声が多かった。ただ、「語り部」たる週刊誌記者が、あまりに善人に描かれていることに不満の声も。

### 『テンペスト』

時代劇が作りにくくなってきているなかで、ドラマ史上、これまでほとんど光があてられてこなかった琉球近代史を題材に、ドラマ化に挑戦。明らかに同一人物とわかる主人公の2役に、登場人物たちが、皆、騙されてしまうなど、設定の一部に不自然さはあるものの、肩の凝らないエンターテインメント劇として評価したい。

### 『世界で誰も見たことがない対決SHOW ほこ×たて』

矛と盾のように、相対立する2つの技術の職人が、その能力の限りを尽くして競い合う。その技術をガチンコで競うコンセプトが新鮮。そのアイデアは、十分に国際市場に通用するとの声も。

### 『世界一受けたい授業』

素朴な疑問を、学校の授業を模したスタジオで、解き明かしていく知的エンターテインメント。科学をわかりやすく紹介しようとの姿勢は評価できるが、スタジオの位置づけが曖昧。番組全体の構成、演出に、もっとメリハリが欲しかった。

### 『のどまんTHE!ワールド』

日本の大衆歌謡に魅了された外国人10名が、持ち歌の日本のヒット曲を熱唱。その喉を競う。コンセプトは面白いが、出演者の出身国に偏りが目立つとともに、番組の構成が単調で、勢い出演者の歌唱力に頼りぎみとなるのが残念。

以上、最終選考に残った8作品の審査では、論議の末、最終的に今年の総務大臣賞には、『若き宗家と至高の三味線』を選んだ。

## 「ATP賞テレビグランプリ2011」総務大臣賞 審査委員

- ◆審査委員長 音 好宏(上智大学新聞学科 教授)
- ◇審査委員 金 玄基(中央日報 日本支社長)
- 鈴木 嘉一(読売新聞編集委員)
- ピーター・バラカン(プロードキャスター)
- 桧山 珠美(放送評論家)

(敬称略)